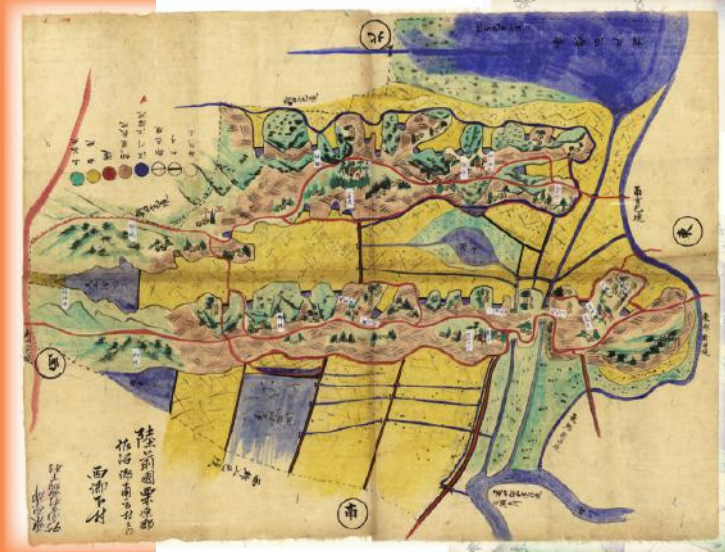
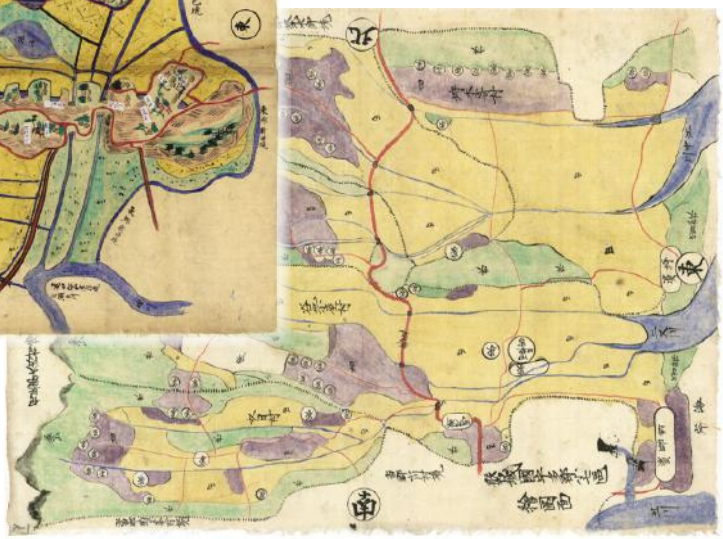
NEWS from MIYAGI PREFECTURAL ARCHIVES

宮城県公文書館だより

第 31 号





ワークス
明治時代の郡区町村図を見てみよう！

公文書レポート
伊達政宗と青葉神社

知っ得！情報

今から約 150 年前、あなたの住んでいる地域は、どんな景観が広がっていたでしょうか？タイムマシン代わりに、当館の明治時代の郡区町村図を見て、タイムスリップしてみてはいかがでしょう。

【　　】は、当館所蔵資料の整理番号を表しています。

ワークス
明治時代の郡区町村図を見てみよう！

専門調査員　澁谷　悠子

絵図面をもっと利用してもらうために

平成 26 年（2014）7 月 1 日に絵図面デジタルデータの CD-R 複写サービスを開始して以来、たくさんの利用者の方に絵図面データを利用して頂いています。複製カラーコピーやカラーマイクロフィルムの閲覧提供は以前から行っていましたが、複写物の提供はモノクロプリントのみでした。その点､絵図面デジタルデータはカラーの情報が提供できます。本サービスが徐々に利用者の方に知られるようになった結果、平成 27 年（2015）度の絵図面利用者は前年度に比べて約 2 倍に増えました。

以前、「当館イチオシ！絵図面デジタルデータ」（『宮城県公文書館だより』29 号）と題して、絵図面の概要とデータの利用促進について書きましたが、さらに多くの方に利用して頂くため、3 回シリーズで様々な角度からその魅力をご紹介したいと思います。

今回は、絵図面のうち、昔の町や村などを描いた郡区町村図について取り上げます。

郡区町村図ってどんなもの？

当館所蔵の郡区町村図の特徴を Q ＆ A 形式でまとめてみました。

その①Q．**郡区町村図には何が描かれているのですか？**

A．　山・川、田畑、寺社、地名、町や村の範囲などが描き込まれています。例えば、佐沼町（現宮城県登米市迫町佐沼）の図では、畑・屋敷は黄土色、道は赤色、沼・川は青色など、土地の利用状況を色分けしています（図 1）。

その②Q．**どの地域の郡区町村図がありますか？宮城県以外のものもありますか？**

A．　作成当時の地域区分で、北は本吉郡、南は伊具郡までの図を所蔵しています。地域によって点数にばらつきがありますが、各郡で 50 点～ 100 点あります。

ただし、現在の福島県相馬郡新地町にあたる宇多郡の図が 11 点あります。この地域は、江戸時代には仙台藩領でしたが、明治元年（1868）に盛岡藩所属になった後、所属県がめまぐるしく変わりました。明治 5 年（1872）1 月に宮城県となりましたが、明治 9 年（1876）4 月には磐前（いわさき）県となり、最終的には同年 8 月に福島県の所属となりました。宇多郡の図は、おそらく明治 9 年 4 月の宮城県から磐前県への所属替え以前に作成されたと考えられますが、これらが福島県へ移管されずに宮城県に残された理由は不明です。

宇多郡の図のうち、宇多郡今泉村の図（明治 5 年～明治 7 年（1874）頃）を見ると､「塩田」と「カマヤ（釜屋）」が描かれており（図 2)､当時､塩を作っ

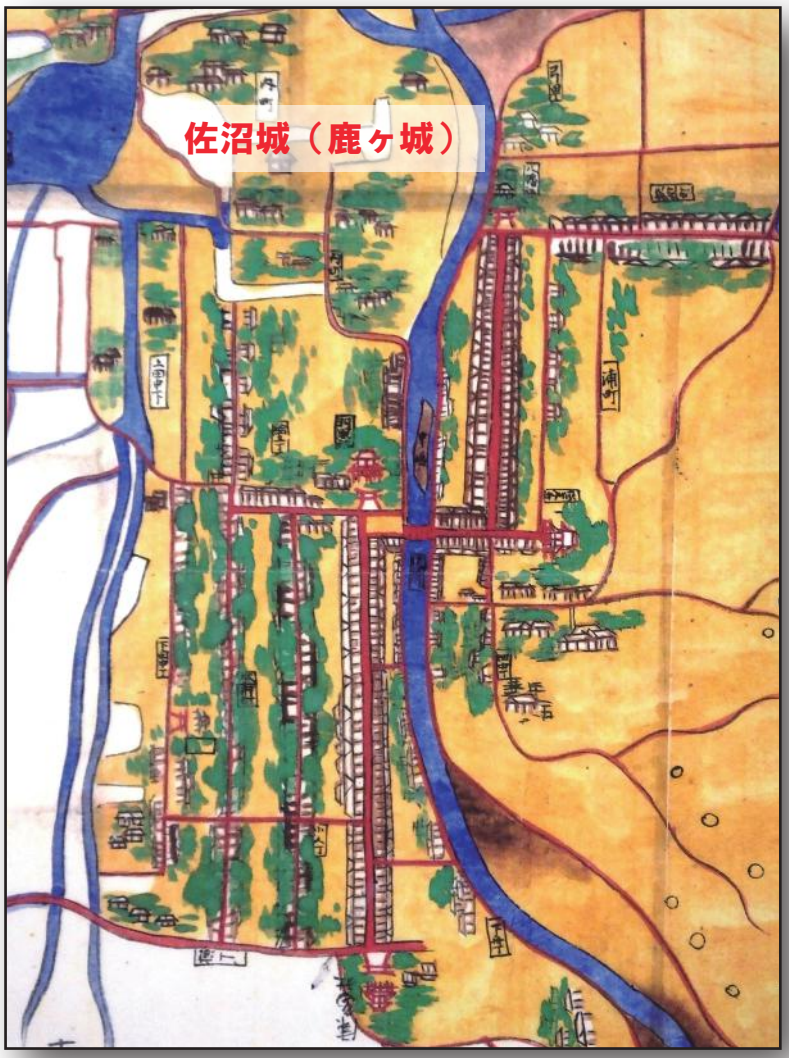


図 1
【V-840】 栗原郡北方村之内佐沼町

江戸時代、佐沼は栗原郡北方村に属しており、明治 11 年（1878）に登米郡に編入されました。

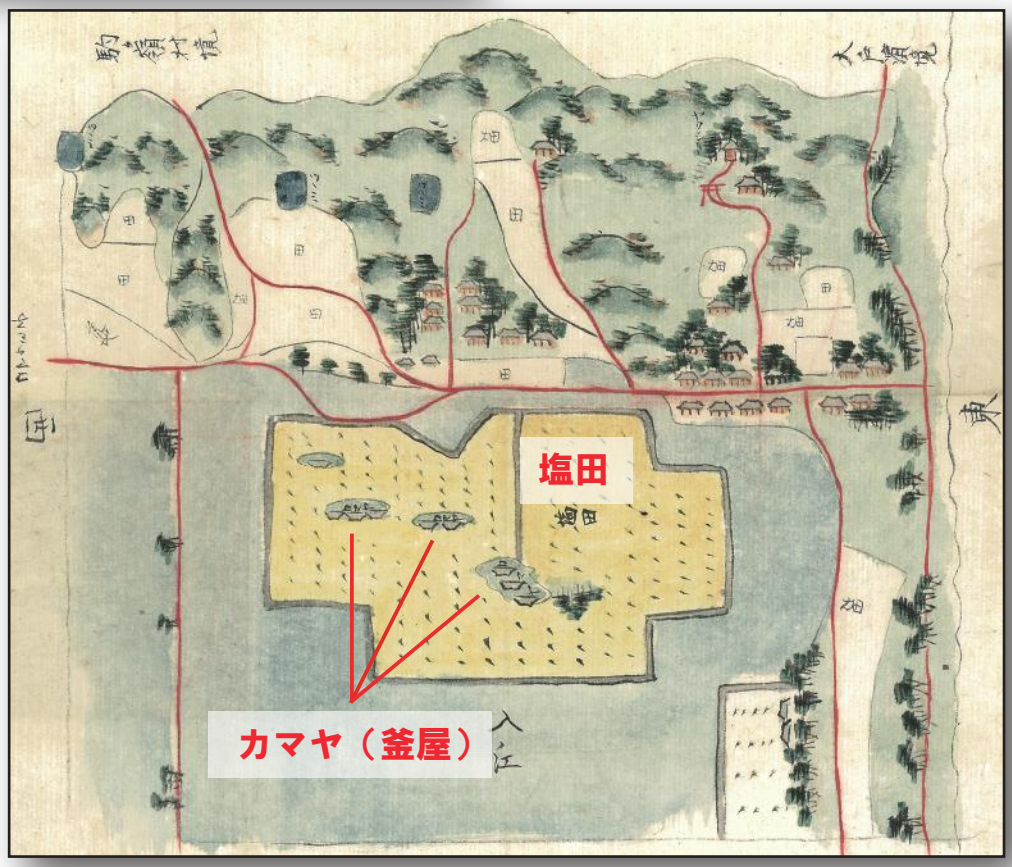


図 2
【V-206】 宇多郡今泉村
（第十九大区宇多郡
小八区今泉村）

ていたことが分かります。こうした景観は、時とともに移り変わってしまう上、当地域周辺は、平成 23 年（2011）東日本大震災の津波で大きな被害を受け、文化財や史跡が破損・流失してしまいました。郡区町村図は、今の景観から失われてしまった、昔の様子をうかがい知ることができます。

その③Q．**宮城県内の郡区町村図は全て揃っていますか？**

A．　残念ながら、全ての郡区町村図はありません。隣り合う町・村であっても、図が残っている町・村と、そうでないところがあります。そもそも郡区町村図は土地把握のために作られたと考えられ、全郡区町村の図が作られていても不思議ではありません。これらが残っていないところは、何らかの理由で作成されなかったのか、作成後から当館に移管されるまでの間に失われてしまったのか、はっきりとしたことは分かりません。

その④Q．**郡区町村図が作られたのはいつですか？**

A．　年号が書かれた郡区町村図は全体の 2 割弱の 239 点しかなく、作られた年が分かるものは少数です。この年号の傾向を見ると、明治 2 年（1869）に始まり、明治 5 年、明治 8 年（1875）、明治 15 年（1882）の 3 ヶ年に約 8 割が集中し、最も新しい年号は明治 41 年（1908）です。これらの時期は、大区小区制の公布（明治 5 年）、連合町村区域更正（明治 14 年（1881）・明治 17 年（1884））など、地域区分がめまぐるしく変わった時期にあたります。この時期に集中しているのは、図の作成が郡区町村の範囲・名称の変更をきっかけにしていていることと関係が深いといえます。年号が書かれていない場合には、描かれている内容や郡区町村名などの表記から、おおよその年代を推定することができます。

しかし、作成年を考える際にやっかいなのは、「○○年製」などとある場合を除き、図に書かれた年号が作成年を示しているとは限らないという点です。特に、原図の写しは、図内で表現されている時期と、実際にその図が作成された（写された）時期の間にずれがある場合が考えられます。

その⑤Q．**明治時代よりも古い村絵図はありますか？**

A．　江戸時代の文政年間（1818 ～ 1830）の年号が記された村絵図が 4 点あり、このほかにも、内容から江戸時代のものと判断できる村絵図もあります。ですが、基本的に当館所蔵の図は、明治時代以降に作成されたものが大部分を占めています。

公文書館以外に絵図・地図が見られる施設は？

当館以外にも、明治時代以降の絵図・地図を持っているところがあります。宮城県図書館３階のみやぎ資料室では、明治 10 年代（1877 ～ 1887）に成立した「皇国地誌附図」をモノクロプリントとカラーマイクロフィルムで閲覧することができます。「皇国地誌」は、明治８年（1875）に明治政府によって編さんが命じられた地誌で、そのなかに「附図」として各村の絵図が含まれています（図 3）。閲覧にあたっては、みやぎ資料室受付カウンターへお問い合わせ下さい。

図３　陸前国宮城郡地誌附図　宮城県管轄陸前国宮城郡塩釜村
（宮城県図書館所蔵）

また、みやぎ資料室では、古い地形図を見ることができます。例えば、塩釜の場合、大正４年（1915）に陸軍参謀本部陸地測量部が作成した２万５千分の１地形図があります。

ほかの図書館・博物館などでも、江戸時代や明治時代以降の絵図・地図を持っていることがあります。当館と同じく、全地域のものがあるとは限りませんし、館によって閲覧形態は様々だと思います。まずは、お調べになりたい地域の図書館などに問い合わせされてはいかがでしょうか。

おわりに

今回は郡区町村図に絞ってご紹介しましたが、次号と次々号では別な切り口で絵図面を取り上げたいと思いますので、ご期待下さい。

なお、郡区町村図に興味を持たれた方は、是非、当館 HP の「絵図面デジタルデータリスト」（Excel ファイル）をご覧下さい。現在、郡区町村図 1,327 点のうち、約半分の 603 件のデータが利用可能です。これらは、地域の昔を知ることができる絶好の資料ですので、ふるってご活用下さい。

公文書レポート

伊達政宗と青葉神社

専門調査員　栗原　伸一郎

前号の「大槻文彦と伊達家爵位昇進運動」に引き続き、近代における伊達家の顕彰をめぐる旧家臣や宮城県内の動きについて述べたいと思います。今回取り上げるのは、藩祖伊達政宗を祭神とする青葉神社です。

青葉神社については、大正３年（1914）に、社格の昇格運動が他の旧藩の城下町（上杉家の米沢、前田家の金沢）との対抗意識において展開されたことや、国語辞典『言海』を記した大槻文彦が請願書の作成に関わり、政宗と朝廷との関係や支倉常長のヨーロッパ派遣について詳述されたことが指摘されています（高木博志「紀念祭の時代―旧藩と古都の顕彰―」、佐々木克編『明治維新期の政治文化』、思文閣、2005 年）。以下では、その前後を含めた昇格運動と、それに伴う移転問題について、当館所蔵の公文書や当時の新聞などからご紹介します。

青葉神社の創建

まず、中心人物の日記や請願書（「青葉神社創建当時の記録」、『仙台郷土研究』10 巻 9 号、1940 年、復刻 1980 年）などから、青葉神社が創建される経緯について確認します。

明治６年（1873）８月、旧仙台藩医の小泉長善は、宮城県参事の宮城時亮に対して、伊達政宗の祭典許可を求める歎願書を提出しました。その理由の一つは、茨城（水戸）と置賜（米沢）で藩祖の祭典があったということでした。他の旧藩への対抗心は、神社を創建する段階からあったことが分かります。

同年 10 月、小泉は同志２人と再び歎願書を提出しました。同志の一人は、米沢で藩祖（上杉謙信）の祭典が盛んなことを目撃し、帰県した人物でした。この歎願書には、政宗をはじめ「始祖朝宗ヨリ先藩主斉邦」に至るまで「伊達家三十世六百余年」にわたって「王事ニ勤労」し、近世期に陸奥守として東国を鎮静し「五十余郡ノ旗頭」と称されたことが記されています。前号では、明治 26 年（1893）に大槻文彦が作成した「伊達家陞爵請願書案」で、「勤王」や地域の鎮めとなる大藩である点が強調されたことを紹介しましたが、それより具体的ではないにせよ、似通った論調になっています。ちなみに、13 代藩主伊達慶邦まででではなく、12 代藩主伊達斉邦までとしているのは、慶邦が戊辰戦争の際に「朝敵」とされたためでしょう。

「勤王」との関係で言えば、斉邦が朝廷の許可を得て、仙台の亀岡に政宗を祀る社を建立したが、途中で廃止されてしまったと歎願書に記しているのは注目されます。天保４年（1833）から翌５年（1834）にかけて、飢饉対策の御救普請として「亀岡新宮」を造営し、本堂などが完成したものの、幕府が造営を認めず破壊されていますので（『仙台市史』通史編５近世３、2004 年）、このことを意識していると思われます。

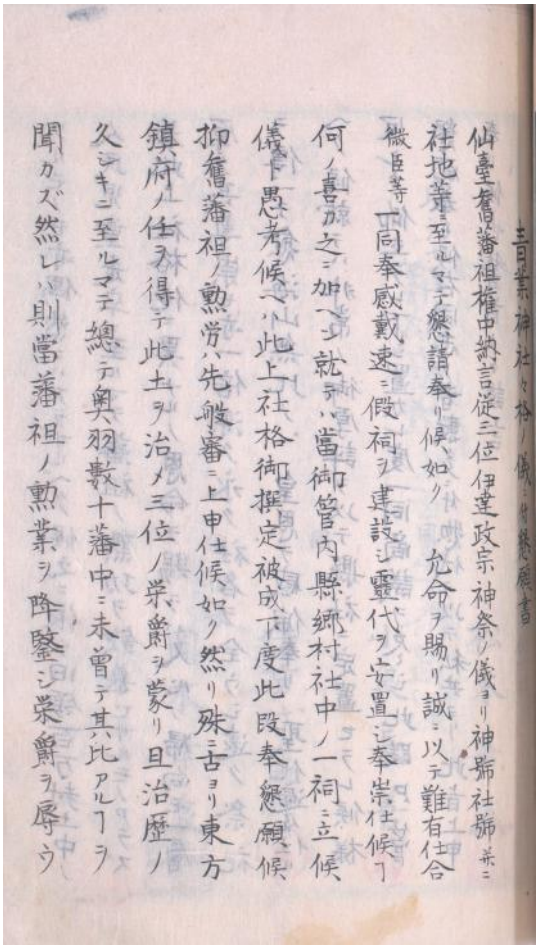
ところで、神社創建に向けた小泉たちの動きは、必ずしも伊達家と綿密な打ち合わせを

した上で進められたものではありませんでした。小泉の日記によれば、明治６年10月、小泉たちは伊達邸に出向き、慶邦の意向を聞かずに歎願書を提出したことを弁明しています。また、明治７年（1874）１月、歎願が許可されたことを受けて、小泉は伊達家に対して、瑞鳳寺（ずいほうじ）を造営場所とするべきか意向を確認しましたが、神号・社号を含めて具体的な指示はありませんでした。瑞鳳寺は政宗の菩提寺で、山内には政宗の霊廟である瑞鳳殿（ずいほうでん）や２代藩主・３代藩主の霊廟がありました。

その後、小泉と同志たちは「門閥」「大家歴々」といった伊達家旧臣に、創建が許可されたことを連絡しました。また、神号を「武振彦命（たけふるひこのみこと）」とし社号を「青葉神社」とする伺書や、「地高ニテ庁下居住ノ人家眼下ニ見下シ人心冀望之地所」であるとして、北山（現仙台市青葉区北山）にある東昌寺（とうしょうじ）境内を造営場所とする請願書を提出しました。なお、神社の社格を県社とするよう求めた請願書には、「東方鎮府」の任を務め、「奥羽数十藩中ニ未曾テ其比アルコトヲ聞カズ」といった主張が見られます（「自明治五年至八年 社寺綴」【M8―49】）。

こうして、明治７年11月に県社・青葉神社の鎮座式が行われました。また、前年より社人に、一門（家臣の筆頭家格）であった留守邦寧（るすくにやす）といった旧家臣も加わり、協力者・賛同者も徐々に増えていったようです。

しかし、青葉神社の運営は厳しいものでした。そのため、明治11年（1878）７月には、祠官の伊達宗広（だてむねひろ）が県に対して、寄付金募集を行いたいと申し出ています（「明治十一年同十二年 社寺願伺綴」【M12―4】）。


青葉神社々格ノ儀ニ付懇願書
仙臺藩祖権中納言従三位伊達政宗神祭ノ儀ヨリ神祠社祠共ニ
社地等至ルマテ懇請奉リ候、如ノ
微臣等一同奉感戴、速ニ假祠ヲ建設シ靈代ヲ安置シ奉崇仕候ヿ
何ノ喜カ之ニ加ヘシ就テハ當御管内縣郷村社中ノ一祠ニ立候
儀下愚考候ヘハ此上社格御撰定被成下度此段奉懇願候
抑奮藩祖ノ勲労ハ先般審ニ上申仕候如ノ然リ殊ニ古ヨリ東方
鎮府ノ任ヲ得テ此土ヲ治メ三位ノ栄爵ヲ蒙リ且治歴ノ
久シキニ至ルマテ總テ奥羽數十藩中ニ未曾テ其比アルヿヲ
聞カズ然レハ則當藩祖ノ勲業ヲ降鑒シ栄爵ヲ辱ウ

青葉神社々格ノ儀ニ付懇願書（部分）
（「自明治五年至八年　社寺綴」【M8―49】）

昇格運動の展開

明治時代前半の仙台では、政宗の祭祀空間は青葉神社と、瑞鳳殿・瑞鳳寺などが担い、政宗の命日には前者では祭礼が、後者では祭典や戦死者の招魂祭が行われていました（佐藤雅也「誰が藩祖伊達政宗を祀るのか」、高木博志編『近代日本の歴史都市―古都と城下町―』、思文閣、2013年）。しかし、青葉神社は境内が狭く、例祭挙行も困難な状況でした。こうした状況下で、神社の社格を別格官幣社（べっかくかんぺいしゃ）に昇格させようとする動きが出てきます。

明治19年（1886）、小泉長善は日誌に、政宗は「奥羽五十四郡ノ旗頭」であり、社格が昇格するは当然だが、「士庶民」も困弊しているため、前年の政宗の二百五十年祭までに神社の「永遠維持ノ方法」が立たなかったと記しています。小泉は、「永遠維持ノ方法」を立て、社格を昇格させるのが「君臣ノ義務」であると考えていました（前掲「青葉神社創建当時の記録」）。また、大槻文彦は、明治16年（1883）４月に知事松平正直（まつだいらまさなお）が

遠藤信道（塩竈神社宮司）や増田繁幸（県会議長）が連署した昇格請願書を国に提出したとし、これを伊達家の爵位昇進につなげようとしていました（「陞爵請願書材料」、一関市博物館蔵）。

その後、青葉神社の基本財産を確立し、昇格を目指す様々な組織が運動を展開しました。明治30年（1897）、氏子総代会で神域拡張や荘厳な社殿の建築、昇格について議論が出たことを契機に、一門であった伊達邦成（男爵）を総裁とする青葉追遠会が組織され、旧仙台藩領で寄付金を募りました（『河北新報』明治33年11月27日）。昇格を唱えた知事樺山資雄は、会合において、赴任後に参拝してみると、予想に反して規模が小さく壊れていたので、改善を願うようになったと述べています（『河北新報』明治30年9月28日）。明治32年（1899）、政宗を顕彰する仙台開設三百年紀念祭が開催されたことで、昇格への期待も高まりました（『河北新報』明治32年4月5日）。

しかし、凶作と戦争で地域が疲弊したことで、寄付金は思うように集まらず、明治40年（1907）頃までに青葉追遠会は立ち消えになりました。『河北新報』は社説で、昇格運動での「仙台市民並旧藩民」の奮起を促しました（『河北新報』明治40年5月24日、明治42年7月13日）。伊達家の旧家臣だけではなく、「旧藩民」すなわち宮城県民全体の問題であると訴えたのです。その後、青葉神社に至る道筋にある市内の通町・北鍛冶町・二日町・国分町の有志が基本金を募り、昇格を請願する計画を練りますが（『河北新報』明治41年3月12日、明治41年4月25日）、成果はあげられませんでした。

明治42年（1909）7月、昇格申請を目標に青葉義会が組織されました（『河北新報』明治42年7月17日）。寄付金募集は好調で、会長の遠藤庸治（前仙台市長）以下の幹部は、来年に社殿を新築し昇格を出願したいと意気込んでいました（『河北新報』明治42年11月5日）。

その後、新たな組織として誕生したのが青葉神社奉賛会です（以下、「明治三十四年 社寺 神社 青葉神社奉賛会 二ノ二」【T14―34】による）。大正3年（1914）1月、県知事森正隆は県会議事堂に、仙台在住の旧家臣、県庁の各課長、県会議員、新聞社社長、銀行頭取などを招集しました。会合で森は、青葉義会のような従来の有志の運動は、県当局との間に「一致連絡」がなかったと批判しました。森は内務大臣と神社局長に昇格の必要性を説明し、了解を得たことなどを話し、有志の運動を県に引き継ぐよう提案しました。これによって、基本財産と社殿造営費の募集を目標に青葉神社奉賛会が組織され、会長に森が就任しました。なお、代々の会長には宮城県知事が就任しました。

これを受けて、大正3年2月に仙台市会は社殿造営・基本財産に4万円寄付を議決し、4月に宮城県参事会は2万円補助を議決しました。宮城県が内務省に申し出ると、県経済が逼迫しているのに多額の補助金を交付するのは不適当であるとの指摘を受けました。しかし、宮城県は補助を押し進めました。

また、大正3年4月に宮城県は内務省に昇格請願書を提出しました。これを受けて、大正7年（1918）までに一門であった石川邦光ほか563名も請願書を提出しています（「明治三十四年 社寺 神社 青葉神社奉賛会 二ノ一」【T14―33】）。なお、県の請願書案は、森の依頼を受けて大槻文彦が作成したものです。朝廷と政宗の関係については、前号で紹介した大槻作成の「伊達家陞爵請願書案」の内容を発展させたものでした。

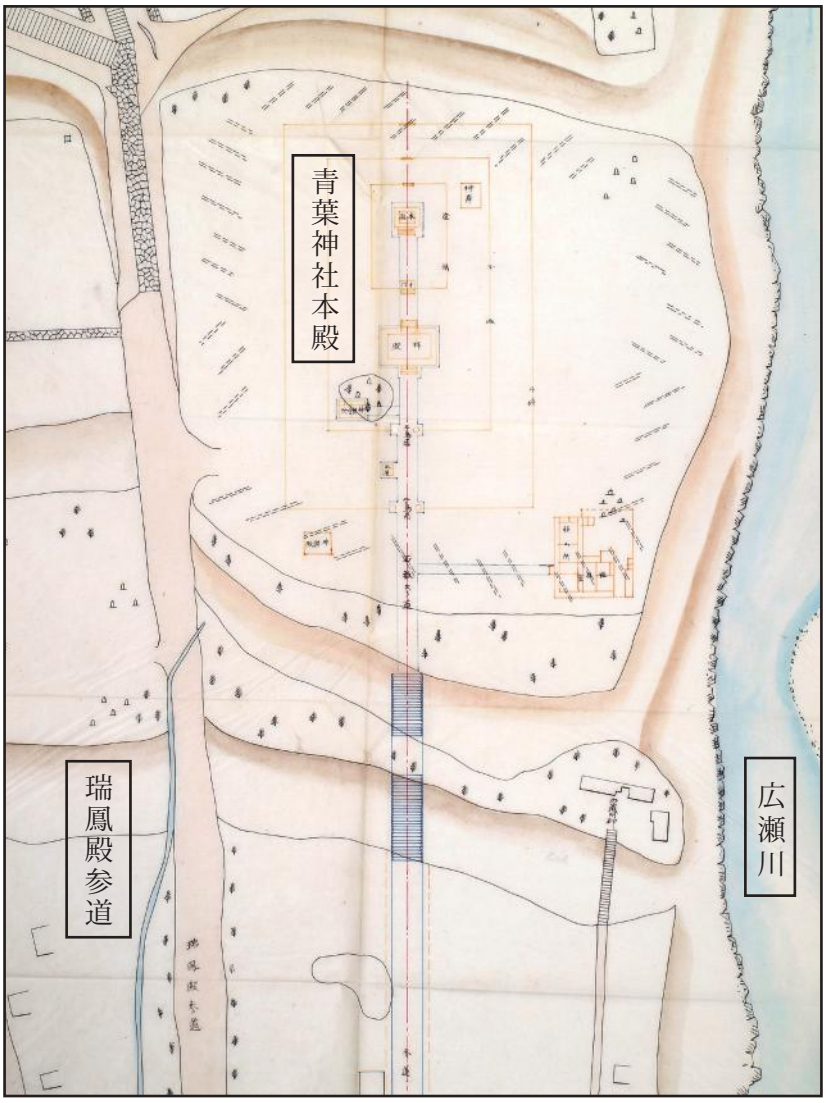
経ヶ峯への移転問題

こうして、青葉神社の社格昇格に向けた社殿の改築が具体化していきましたが、それは神社の移転構想と不可分の関係にありました。移転先に浮上したのは、政宗の霊廟である瑞鳳殿がある経ヶ峯（瑞鳳山、現仙台市青葉区霊屋下）です。なお、経ヶ峯にあった瑞鳳寺は明治29年（1896）に火災に遭い、廃寺同然になっていました。

移転は、明治時代から唱えられていました。例えば、明治32年（1899）には、北山に比べて経ヶ峯は風景に富み、霊廟が荘厳であるから、経ヶ峯一帯に公園を作り青葉神社を移転すれば一挙両得であるとの主張が見られます（『河北新報』明治32年3月30日）。また、同時期には、伊達宗亮（大條孫三郎）も青葉神社を経ヶ峯に移転して公園を開くことを論じています（『河北新報』明治32年4月6日）。明治43年（1910）には、青葉義会が東京在住の有力な旧家臣である富田鉄之助（男爵、元日本銀行総裁）と高橋是清（男爵、貴族院議員）に移転案を示し、賛意を得たようです（『河北新報』明治43年2月6日）。

この問題は青葉神社奉賛会でも取り上げられました（以下、前掲【T14―34】による）。大正6年（1917）12月の評議員会では、参加者から、参詣が容易で公園を兼ねた場所を選定すべきであるとの発言があり、それに対する反対意見が続出しました。会長の県知事浜田恒之助は、奉賛会として北山に決定することを宣言しました。

しかし、大正7年（1918）1月、奉賛会に伊達家旧臣55名が連名で、移転を求める請願書を提出しました。請願書には、石川邦光はじめ一門6人や片倉健吉（男爵）も名前を連ねており、かつての重臣が多く含まれています。石川たちは、北山に青葉神社を建設したのは「旧臣民中一部有志者ノ発案」で深く研究したものではないとして、「由緒薄ク人心ノ帰向セザルヨリ」神社が隆盛していないと指摘しました。石川たちは、日光東照宮のように、「多



青葉神社建築設計図（移転計画図の一部）
（「明治三十四年　社寺　神社　青葉神社奉賛会二ノ二」【T14―34】）

数旧臣民ノ最モ尊崇景仰」する瑞鳳殿を「奥ノ院」とし、瑞鳳寺境内や隣接地に青葉神社の拝殿などを設置するよう請願しました。この請願以降、それに同調する請願書が続々と寄せられました。

石川たちの請願書には大槻文彦の所論が添付されています。大槻は、帰省しても青葉神社に参拝せず、瑞鳳殿に出向くとし、北山は政宗に関係なく「奉安地理に不服の念」があるため、「遺臣」は昇格運動に関わったが運動熱も十分でなかったと述べます。大槻は瑞鳳寺の跡に神社を移転するか、瑞鳳殿を神社にすることを主張しました。そして瑞鳳殿を公開すれば、仙台市観光の人々は必ず参拝し、仙台市は繁盛すると主張したのです。

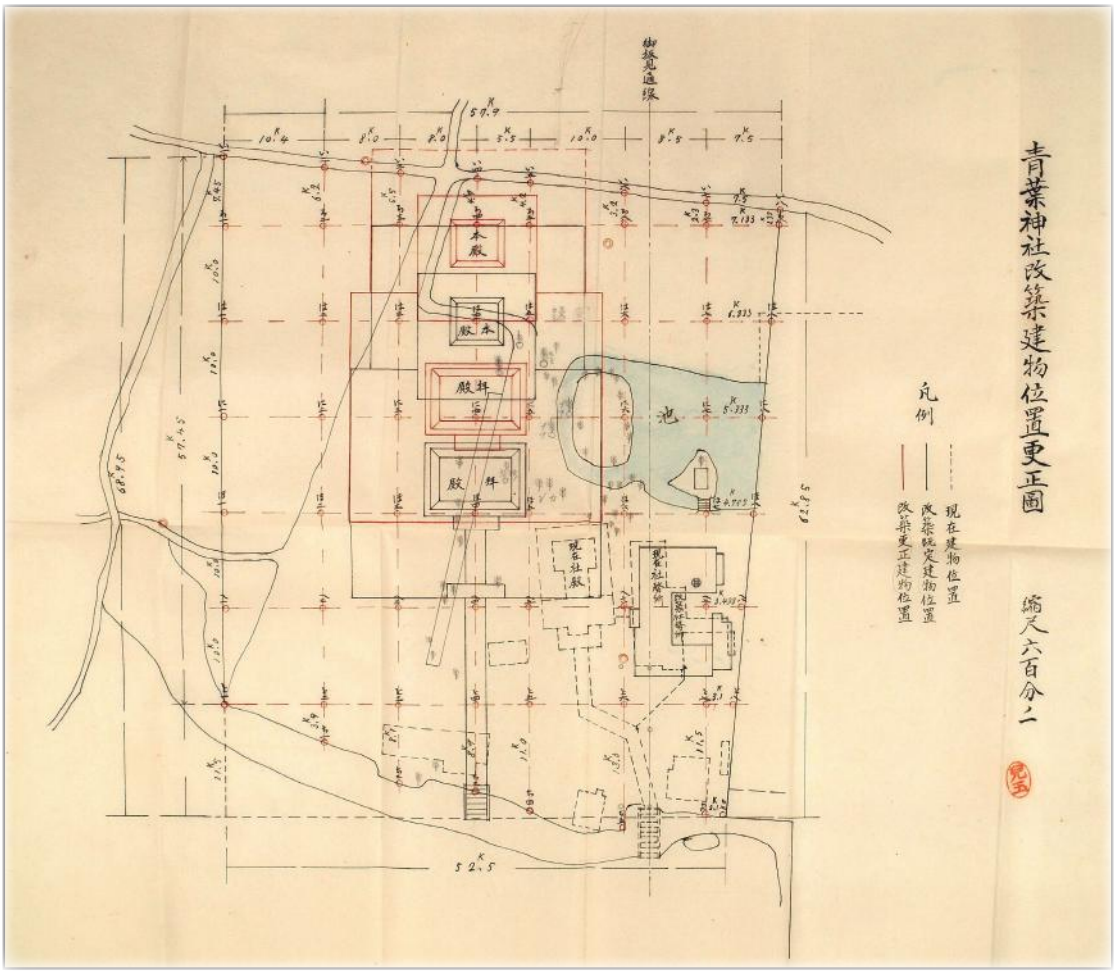
このように移転派には、有力な伊達家旧臣が含まれていました。その主張の背景には、藩祖の祭祀空間の統合はもちろん、公園建設や観光客誘致といった狙いも込められていました。もちろん、旧家臣のなかには反対派もおり、大正３年（1914）２月には、仙台市内各地区の発展の均衡を図る観点から、衰退している市内西北部にある北山に建設すべきだとする意見が寄せられています（前掲【T14―33】）。いずれにせよ、移転の是非については、地域の発展のあり方が論点の一つになっていたのです。

この段階で青葉神社の建築案としては、①北山の現在地で改築する案、②移転して拝殿を建築して瑞鳳殿を本殿とする案、③移転して本殿を建築して瑞鳳殿を奥の院とする案がありました。大正７年２月、浜田は内務省神社局長に意向を尋ねたところ、移転に懸念を示す返答を受けました。その理由は、霊廟が神社となった事例は日光東照宮のみで今日と異なる神仏混淆（しんぶつこんこう）の時代だった、隣に２代３代の霊廟があれば「奇観」を呈す、清楚な本殿より華麗な奥宮が主体のようになり崇敬の中心が二つとなる、奥宮を置くのは地理上やむを得ない場合である、というものでした。

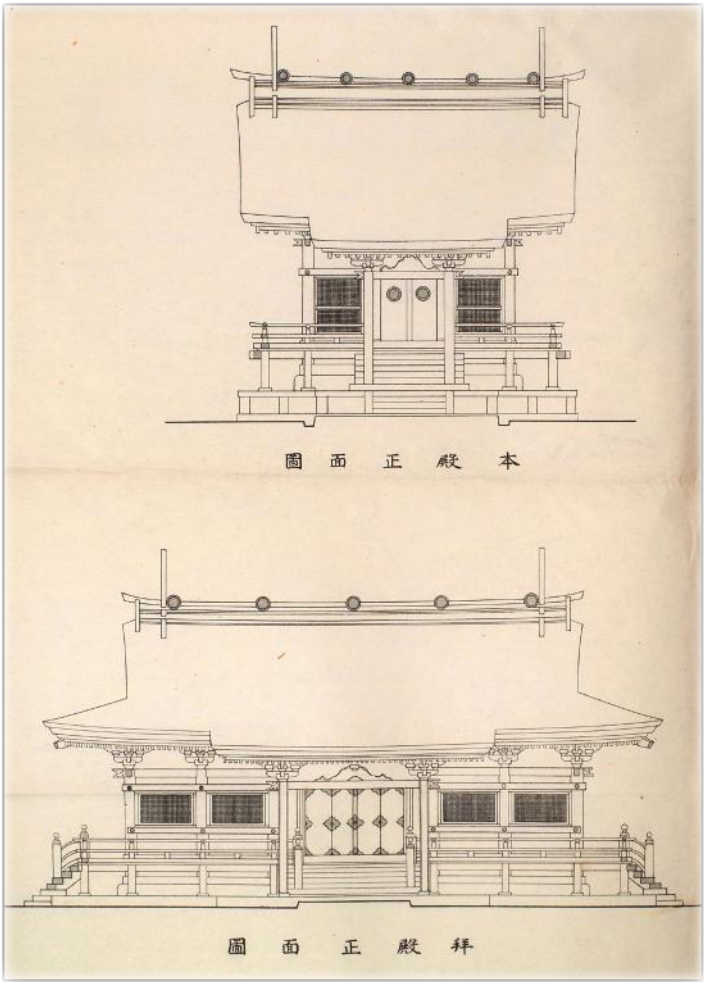
このことで、移転問題は下火になり、北山に社殿を改築することに内定したようです（『河北新報』大正８年５月21日）。ただし、大正９年（1920）には、再び知事に就任した森正隆に対し、移転問題は未解決であるとして、第三の案として県庁敷地内移転案を示した人物もおり（『河北新報』大正９年９月10日）、しばらく問題がくすぶっていました。

紆余曲折を経て、大正11年（1922）、北山において社殿の改築工事が始まり、昭和２年（1927）に竣工、同３年（1928）５月に遷座式が行われました。

新社殿の完成によって、昇格運動が再開されました。昭和３年８月、青葉神社の社司となっていた片倉健吉は、昭和天皇の即位の大典を契機として、朝廷への貢献や「東北の重鎮」としての地位、毛利・上杉・前田と扱いに差があることを理由に、昇格請願書を提出しました（『河北新報』昭和３年８月18日）。また、昭和10年（1935）には、伊達政宗公三百年祭の実施を契機として、宮城県が内務省に昇格請願書を提出しました（『河北新報』昭和10年４月18日）。昭和14年（1939）と15年（1940）には、遠田郡の者が紀元二千六百年の祝典を契機として、昇格請願書を提出しています（公文雑纂、国立公文書館デジタルアーカイブ）。しかし、結局昇格は実現せず、昭和21年（1946）に社格制度は廃止されました。



青葉神社改築建物位置更正図　（「青葉神社改築工事　契約書　其ノ一」【T13―11】）



青葉神社本殿拝殿建築図
（「明治三十四年　社寺 神社
青葉神社奉賛会　二ノ二」
【T14―34】）

知っ得！情報

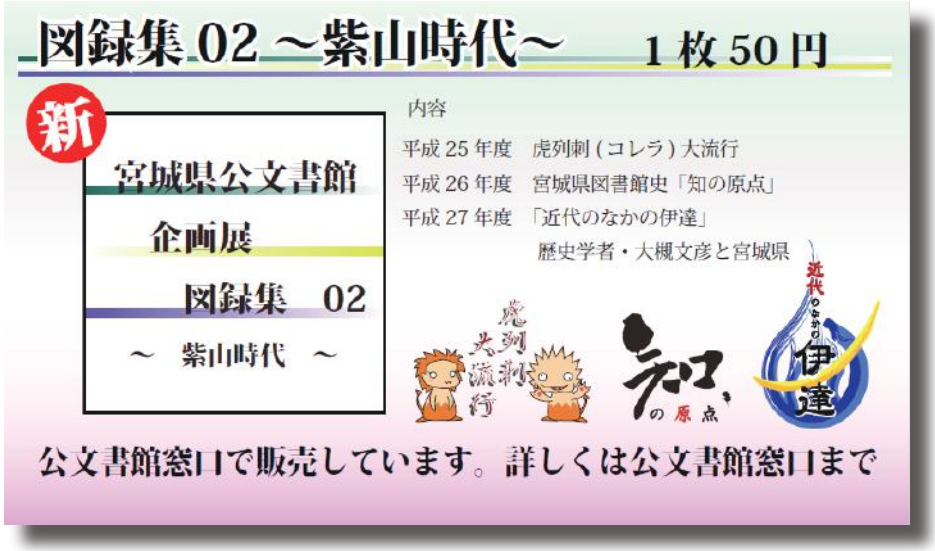
◆　閲覧証の有効期限が５年間になりました　◆

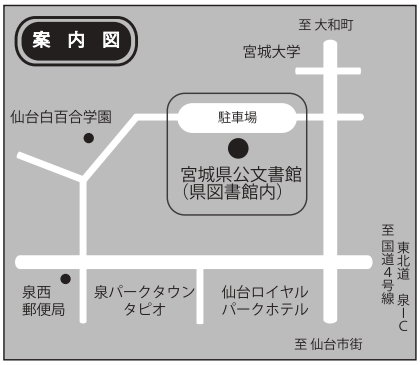
平成 28 年（2016）６月１日から、当館閲覧証の有効期限が１年間から５年間に延長となりました。
現在、有効期限内の閲覧証をお持ちの方は、閲覧証に記載された期限から４年延長した閲覧証を再発行いたします。

例）有効期限：平成 28 年８月２日→**平成32年8月1日**

◆　企画展図録集が新しくなりました　◆

企画展図録集データに、平成 27 年度の企画展「近代のなかの伊達」を追加いたしました。『図録集 02 ～紫山時代～』（CD-R1 枚 50 円）には、「近代のなかの伊達」のほかに、平成 25 年度の企画展「虎列刺（コレラ）大流行」、平成 26 年度「宮城県図書館史「知の原点」」が収録されています。会期中に展示を見ることができなかった方は、是非ご覧下さい。



宮城県公文書館だより　第 31 号
平成 28 年（2016）８月１日　発行

編集・発行　宮城県公文書館
〒 981-3205　宮城県仙台市泉区紫山 1-1-1
電話　022（341）3231　Fax　022（341）3233
e-mail　koubun@pref.miyagi.jp
http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koubun/